

国立台南芸術大学大学院でのアートレジデンス[ゲストアーティスト]の報告

迫 能弘

台南大学のレジデンスの話を受けて、正直、迷いました。

何をしたらいいのか？という不安もあったし、それまでは、そのようなアートの匂いがする事とはあまりに縁がなかったので戸惑いました。

しかし、自分の中で、行った方がいいのじゃないか！という気持ちになり、家内の「行ってきたら」と言う一声も決定打となって、行くことに決めました。

行こうと決めて、自分の頭の中に浮かんだのは、南蛮を焼こう！という思いでした。

南蛮焼は江戸時代の南蛮貿易で日本にもたらされた焼き物です。

日本の陶芸家で、小山富士夫氏、中里隆氏、森岡成好氏などの作品で、よく目にはしていたので以前から、とても興味を持っていました。

私のイメージとして、南方で焼かれていた焼き物であり、「ひょっとしたら、台湾でも焼かれていたんじゃないか？」という気持ちもありました。以前に台南大学に行かれた日本の陶芸家の方から、現地の瓦用の土で、南蛮を焼いた人がいるという話を聞いたこともあり、自分も台湾の地で、是非、南蛮焼に挑戦したいと思いました。

現地に着いて、土を触り、作陶を始めると、行く前の不安はすぐに吹っ飛びました。

台南芸術大学大学院の受け入れ体制が本当に素晴らしかったです。教授の張老師、一年生5人を中心としたサポート体制が、外国での作陶というハンディをほとんど感じさせない、打ち込めるという意味では、日本よりもいい環境での1ヶ月間を与えて頂きました。おそらく、日本でも、そうとう自分を追い込み、思考を深くして、長い時間をかければ到達できるのであろうけれど、レジデンスにより、例えるなら外科的に短い期間で強制的に到達させてもらえた感じです。

南蛮焼という低火度のやきしめは初めてでした。

台湾で1ヶ月の一発勝負というのは今から考えると、かなり厳しい挑戦だったのかもしれませんが。しかしながら、その過程で本当に貴重な体験、実験が出来たと思います。結果的に焼成は失敗でしたが、もちろん、改めて南蛮焼に取り組みたいと思っています。春までに自分の穴窯で南蛮を焼きます。土も近隣から採取した南蛮に向くであろうものをテストしています。

与えられた条件が、自分の満足できるものじゃない時もそれを最良な形に活かしてアジャストさせる柔軟性の必要も久しぶりに実感しました。今まで、自分が普段していた作陶の流れも客観的に見ることができました。大きな収穫だと思います。これからの自分が進むべき方向性も少し見えた気がします。

滞在していました台南市は、八田氏がインフラ(ダム)開発した所であり、何か縁を感じました。

また台南市は台湾で最も古くの港町です。オランダが統治した時代にできた古城のレンガの断面を見たときも南蛮焼に通ずる質感を感じたりもしました。

自分の中で、港町で、土もあってとなると、ひょっとしたら台湾で焼かれていた南蛮焼もあるのでは…と思いを馳せたりしました。

台湾でのアートレジデンスのおかげで、頭のなかで思っていた南蛮焼がかたちづくれる自分の現実のものとなり、近々自分の窯で焼くまでになっています。

去年の秋までは想像できないことをたくさんいただきました。

引っ込み思案のわたしが台湾でたくさんの若い友人ができたこともそのうちの一つです。

また、自分の中で、信楽に来られた外国の人や若い陶芸家を見る目が変わったと実感しております。

かかわって頂いたすべての人々に感謝の気持ちでいっぱいです。